立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）

２０１４年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局･職	氏　名		
	文学部・准教授	小澤　実　　印		
研究課題	グローバルヒストリーのなかの近代歴史学			
研究組織	所属研究機関・部局・職	氏　名		
	立教大学・文学部・教授	石井規衛		
	立教大学・文学部・教授	奈須恵子		
	立教大学・文学部・准教授	佐藤雄基		
	学習院女子大学・国際交流学部・准教授	工藤晶人		
	慶応義塾大学・経済学部・准教授	松沢裕作		
研究期間	２０１４年度　～　２０１６　年度			
研究経費	２０１４　年度	２０１５年度	２０１６年度	総計
(上段：支出金額)	3000000 円	円	円	円
(下段：採択金額)	3000000 円	1800000 円	1200000 円	6000000 円

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、近代日本における歴史家が、具体的にどのような西洋学の方法論や文献を下敷きとして、彼ら自身の研究を構築したのかを再構成し、近代日本における学術知識の流入ならびに日本の文脈におけるその解釈プロセスを明らかとする、史学史（歴史学の歴史）的試みである。その試みは、従来の史学史のように、日本における歴史思想という狭い意味での日本思想史という枠に閉じこもるものではなく、検討成果を世界の歴史学の潮流とその背景にある近代世界システムのなかに置き直すことによって、史学史のグローバルヒストリーを目指すものである。研究組織各位が個人のテーマを進めるとともに、定期的に開催される研究会・講演会・シンポジウムに参加し、討議を行うことで、所定の目的を達成することを期待している。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　史学史　〕〔　グローバルヒストリー　〕〔　近代日本　〕

研究【経過・成果】の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究では、具体的に（１）近代日本の歴史家に対する西洋学知の影響、（２）歴史概念の比較史的研究、そして（１）と（２）を踏まえた上での（３）立教大学における歴史学の展開に焦点を絞り、近代日本における史学史の歩みを明らかにすることを申請書に記した。とりわけ本年度は、（１）と（２）の史資料に即した具体的論点を明示化するために、研究代表者ならびに共同研究者が個々に文献調査と内外の出張を行うことで論集に向けた研究を進めるとともに、研究会を組織し、（い）読書会、（ろ）研究会、（は）公開講演・トークイベント、（に）公開シンポジウムを開催した。順次説明する。

（い）読書会
　読書会は、共同研究者の佐藤雄基が中心となり、昨年度刊行の始まった「岩波講座日本歴史」に収録されている論文を、隔週で取り上げ、当該論文の事前配布と検討、大学院生による要約、その後の教員と大学院生による討議により、各論文の歴史上ならびに史学史上の論点を明らかにする試みである。日本史スタッフだけではなく、世界史スタッフや学生も参加し、論文内で語られる事象のグローバルヒストリーにおける位置付けや比較なども検討した。当該読書会に際しては、アルバイトを一人雇用し、準備と記録にあたらせた。

（ろ）研究会
　研究会は、共同研究者もしくは外部講師を招聘して、本研究に関わる史学史上の問題を討議する場であった。

第１回（２０１４年１０月３０日・立教大学）
小澤実（研究代表者）「平泉澄と西洋学知　『中世に於ける社寺と社会との関係』におけるアジール論の検討」
第２回（２０１４年１１月２０日）
山口道弘（千葉大学）「佐野一彦に於る歴史と民俗」
第３回（２０１４年１２月３日）
井川健二（成城大学）「大英図書館が所蔵する前近代日本関係資料について」
第４回（２０１４年１２月４日）
根占献一（学習院女子大学）「歴史学におけるルネサンス　その概念をめぐって」
第５回（２０１５年１月１５日）
佐藤公美（甲南大学）「「離れた比較史」の可能性：日欧中世比較封建制後の方法と課題」
第６回（２０１５年２月４日）
中野弘喜（東京大学出版会）「史学の「理論」と「概論」　明治期歴史叙述方法論の振幅」
太田智己（東京芸術大学）「１９３０～５０年代の美術史学　文献史学への接近」

本年度、全６回開催された研究会では、日本史ならびに世界史の研究者を、その方法論の多様性も考慮して、バランスよく招聘し、論点の抽出を試みた。いずれも充実したレジュメを用意し、十分な時間を報告と討議にあてたため、専門の近接する研究者同士のみならず、方法論・時代・地域を異にする専門家から、通常とは異なる質問え、それぞれの論点の深化はかることが可能となった。それは、史学史という、日本においては必ずしも十分に蓄積のなかった学問分野が、今後たいへん大きな可能性をもっている鉱脈であることを確認することにもなった。

研究【経過・成果】の概要　つづき

（は）公開講演・トークイベント
　公開講演・トークイベントは、研究会よりも一般性のある内容を、学者や研究者のみならず、広く一般の方にも向けて紹介する場であった。

公開講演会（２０１４年１２月１８日：主催は文学部・本研究会は後援）
本郷和人（東京大学）「平清盛と中世日本　歴史学とテレビ」

トークイベント（２０１５年１月８日）
呉座勇一「『一揆の原理』から『戦争の日本中世史』まで」（聞き手：小澤実）

講演会・トークイベントいずれにおいても、歴史家の生きてきた歩みと問題関心とが密接に関わること、そして専門家向けの研究文献のみならず、テレビや啓蒙書というかならずしも専門知を前提としない「世間」結ぶときに歴史家がどのようにふるまうのかという史学史的観点にかかわる論点を得ることができた。

（に）公開シンポジウム
　公開シンポジウムは、外部から講師を招聘し、史学史に関わる所定のテーマに従って議論する場であった。

公開シンポジウム（２０１５年３月４日：主催は文学部・本研究会は共催）
「高校世界史教科書記述・再考」
桃木至朗（大阪大学）「新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して　阪大史学系の取り組みから」
小澤実（研究代表者）「高校世界史教科書における中世ヨーロッパの位置」
上田信（立教大学）「高校歴史教科書における日中関係の記述」
貴堂嘉之（一橋大学）「高校歴史教科書における〈アメリカ合衆国〉　人種・エスニシティ・人の移動史を中心に」

　また、本研究会主催ではないが、共同研究者が複数かかわる次のシンポジウムも本研究と密接に関わる内容であり、かつ研究経過として重要であるため、ここに記す。

第１１２回史学会大会シンポジウム「近代日本のヒストリオグラフィー」（２０１４年１１月９日）
廣木尚（早稲田大学）「１８９０年代のアカデミズム史学　自立化の模索」
寺尾美保（尚古集成館）「明治期島津家における家史編纂事業」
佐藤雄基（共同研究者）「明治期の史料採訪・編纂と古文書学」
コメント：河野有理（首都大学東京）
司会：松沢裕作（共同研究者）

公開シンポジウムでは、同時に複数の研究者が報告することにより、それぞれの報告の持つ論点がいっそう明示化された。１１月９日のシンポでは明治期という一つの時代、３月４日のシンポでは高校世界史教科書という共通するテキストについて、専門を異にする歴史家が史学史的にアプローチを行ったが、このような一つのテーマを複数で論じるやり方が、相乗効果を生み出すことも確認できた。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①
奈須恵子「世界史の中に日本史を位置づける歴史学習－世界史Ａにおける日本史学習の指導法について－」『教職研究』（立教大学）、２５号、２０１５年４月、頁数未定（受理済）

②
なし

③
上記研究の経過を参照

④
上記研究の経過に加えて、

小澤実「戦後日本の北欧中世像　山室静・荒正人・谷口幸男」、2014 年 12 月 22 日、国際日本文化研究センター
工藤晶人「ラウンドテーブル　フランス史との出会い、重なりあう軌跡」、2015 年 3 月 21 日、東京大学（ほかの参加者・深沢克己、大峰真理、坂野正則、野村啓介、松嶌明男）